様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５８０１８６

研究課題名（和文）地方花柳界の盛衰と文化資源化に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）Ethnography of Local Geisha World: Cultural Change and Cultural Property.

研究代表者
島村　恭則（SHIMAMURA, Takanori）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：１０３１１１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本各地の地方都市に形成、展開されてきた花柳界（芸妓、料亭、待合茶屋、検番、置屋、芸事の師匠などからなる社会）と花柳界周辺の社会を対象に、花柳界文化の歴史的変遷、および近年顕著になりつつある文化資源化の実態について、民俗学的方法による全国調査を実施し、地域的特性と全国を俯瞰した全体像を明らかにすることを目的として実施した。
　その結果、株式会社やNPO法人、財団等の設立による花柳界の存続、「舞妓の前景化」現象、花柳界存続と都市祭礼の関係、伝統的花柳界と観光用に再創造された花柳界との葛藤、花柳界における「芸妓」と「娼妓」の間の複雑で流動的な関係などについて多くの知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：In urban cities across Japan, there are “Geishas”, female entertainers, who attend parties to perform their own entertaining arts for example singing songs, performing classical Japanese dances, or playing classical Japanese instruments. On the other hand, Maikos who are young and apprentice geishas. Maikos makes a difference from geisha, for their arts.This research is intended to elucidate the decline of the geisha culture influenced by social change since the end of the 20th century and its reconstruction and reactivation, which is occurring in some cities.I suggest the cause of the decline of the geisha culture is not only economic decline, but also changing audience interest in geishas. The changing audience interest means audience think that Maiko’s “youth and superficial gorgeous (clothes, accessories, and makeup etc.)” more valuable than Geisha's “experienced arts(songs, dances, playing classical Japanese instruments)”.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：花柳界　芸者　舞妓　地方都市　花街　文化資源

１．研究開始当初の背景

京都や東京の花柳界については、明田鉄雄『日本花街史』（雄山閣出版、1990 年）をはじめいくつかの学術研究があり、また花柳界関係者による著作（岩下尚史『芸者論』文芸春秋、2009 年）やジャーナリストによるレポートなども少なからず蓄積され、実態の把握が可能となっている。これに対して、地方都市の花柳界についてその実態を明らかにした学術研究は、皆無である。

こうした中で、研究代表者は、地方都市をフィールドとする都市民俗研究の過程で、全国の地方都市に多数の花柳界が存在し、それぞれの地域で独自の展開を遂げてきたことを知った。そして地方花柳界研究が、これまで京都・東京偏重であった花柳界研究を刷新する研究課題であるとともに、地方都市の社会・文化のあり方を究明する際に不可欠の領域であることに気づき、本計画を構想するに至った。

２．研究の目的

本研究では、日本各地の地方都市に形成、展開されてきた花柳界（芸妓、料亭、待合茶屋、検番、置屋、芸事の師匠などからなる社会）と花柳界周辺の社会を対象に、花柳界文化の歴史的変遷、および近年顕著になりつつある文化資源化の実態について、民俗学的方法による全国調査を実施し、地域的特性、および全国を俯瞰した全体像を明らかにすることを目的として設定した。

３．研究の方法

平成 25 年度から 28 年度までの 4 年間で、地方花柳界を対象とした現地調査（聞き取り、観察）を実施した。各調査地での調査内容は、①花柳界の「しくみ」とその変遷、②花柳界内部の伝承文化、③地域文化との相互関係、④文化資源化の実態の４点であった。

４．研究成果

（１）調査花柳界一覧

まず、４年にわたる本研究でその実態についての情報を収集した地方花柳界を、それぞれの特徴とともにあげると、つぎのとおりとなる。

・札幌市すすき野：花柳界から高級クラブ業界への戦略的業態転換を進める。
・盛岡市八幡町：置屋がなく、家業として芸妓を継承する時代が長く続いた。
・仙台市青葉区立町：商工会議所が「仙台技芸振興の会」を結成して支援 。
・酒田市日吉町：港都振興株式会社による社員芸妓制度の整備で花柳界存続。
・山形市七日町：商工会議所主導で「やまがた舞妓」をブランド化。
・新潟市中央区古町：「新潟まち遺産」として文化資源化。若手芸妓養成盛ん。
・笠間市笠間：笠間稲荷神社門前町の花街として展開。
・木更津市富士見：「江戸の芸者文化」継承の地として自己表象。
・厚木市飯山：東京近郊の花柳界。浅草・向島を意識しつつ独自展開を目指す。
・熱海市中央町：現役芸妓 250 名、現存置屋数 100。日本有数の「芸妓街」。
・静岡市清水区銀座：木材・造船関係の旦那衆が支える。社員芸妓制度導入。
・静岡市葵区常盤町：商工会議所が静岡伝統芸能振興会を結成し支援。
・浜松市千歳町：戦後最盛期の芸妓不足で擬似芸妓「ステッキガール」発生。
・安城市相生町：花柳界文化を伝統芸能と位置づけ安城芸妓文化振興会を結成。
・諏訪市大手：検番組合が芸妓学校「大手見番邦楽学園」を新設（2008 年）。
・名古屋市中区丸の内：「名古屋をどり」「芸どころ名古屋」を花柳界が支える。
・岐阜市米屋町：繊維・木材関係の旦那衆が

支える。幇間（たいこもち）現存。
・桑名市江戸町）：鋳物業の旦那衆文化として持続。石取祭の宿に芸妓参加。
・金沢市東茶屋街・主計町・西茶屋街：城下町金沢の旦那衆文化として持続。
・小浜市三丁町：検番・置屋廃止後、料亭の「抱え芸妓」制度で再起を模索。
・大津市柴屋町：大津絵を題材とした大津絵踊りを芸妓らが今日まで伝承。
・奈良市元林院：京都花柳界の影響を受けつつ奈良の旦那衆文化として独自展開。
・大阪市中央区島之内：南地大和屋による花柳界統合の歴史。北新地も元は花柳界。
・徳島市富田町：阿波商人の旦那衆文化。阿波踊りの形成にも花柳界が関与。
・高知市唐人町：一時衰退するも、「土佐のお座敷文化」の文化資源化で再生。
・高松市百間町：検番・置屋消滅で、料亭が芸妓を抱える「内芸妓」制度発達。
・松山市大街道：検番・芸妓らが NPO 法人松実会を結成。待合茶屋も近年復活。
・福岡市博多区博多駅前：「博多をどり」「芸どころ博多」を花柳界が支える。
・長崎市丸山町：「長崎くんち」では踊り町と検番との契約で芸妓が踊り奉納。
・熊本市新町：一時衰退したが 2007 年に置屋新設。県内各地へ芸妓を派遣。

（2）得られた知見

以上の各地方花柳界について収集した情報にもとづき得られた知見を総論的にまとめると、つぎのようになる（各地方花柳界についての個別的記述は、今後、別途、論文のかたちで公表の予定である）。

なお、以下の知見には、研究代表者である島村恭則の統括のもとに本課題の遂行に従事した研究協力者である谷岡優子による分析も含まれており、当該部分については、谷岡優子にプライオリティがあること、すでに谷岡優子名義での論文発表も行なわれていること、ただし、調査研究の経費については本科研費によっていること、についてここに明記して確認しておく。

①花柳界は、官官接待の廃止と顧客層の嗜好の変化を主要因として 1990 年代から全国的に急速に衰退し、その結果、現在、多くの地方都市で花柳界は消滅してしまっている。しかし、一方で、株式会社を設立して芸妓の雇用、花柳界文化の振興をはかった地域（新潟市、山形市、酒田市、静岡市清水区、富山市）、商工会議所を中心に財団を設立して花柳界を支援する制度をつくった地域（静岡市、安城市など）が存在する。この場合、これらの動きに共通して見出せるのは、花柳界文化を文化資源としてとらえ直そうとする志向である。

②一方、それらの動向とは別に、かろうじて命脈を保っている花柳界が一部存在することにも注目させられる。この場合、こうした状況が今日においても可能になっている理由は、当該花柳界を支える地元の「旦那衆」の存在があることに求められる。花柳界の存続と「旦那衆」の存在との間には、歴史的にもまた現在でも大きな関係があり、上記①で指摘した株式会社化や商工会議所による財団の設立においても、各地域の財界人（伝統的な「旦那衆」の位置に相当）がこの動きのキーパーソンとなっているのである。こうしたことから、各地方都市のいわゆる「旦那衆」に相当する階層が花柳界に理解を示しているかどうかが、花柳界の盛衰や文化資源化の動きを左右していると指摘可能である。

③上記①で指摘した地方花柳界文化の文化資源化の過程で、「マイコの前景化」（谷岡優子による命名）という現象が生じていることを指摘できる。これはすなわち、本来は「芸妓見習い」という周辺的な位置にあるはずの

「半玉」に相当する者が、「舞娘」（酒田）、「舞子」（山形）として花柳界の主役の位置に据えられているという事例である。その背景には、「芸」の質よりも、「華やかさ」や「若さ」を重視する社会一般に見られる風潮の高まりがあるが、一方でそうした風潮の中にあっても、このような動きが見られない地域（盛岡、新潟、長崎をはじめ多数）もある。両者の違いは、花柳界の再組織化の過程において、既存の花柳界文化の担い手である芸妓衆がいかなるかたちの関与を行ない得たかによって生じているといえる。

④調査の過程で、明らかになってきたことの一つに、地方都市の祭礼と花柳界との関わりという現象がある。長崎市のくんち、福岡市の十日戎やどんたく、大阪市の十日戎、高知市のよさこい祭りをはじめ、各地の都市祭礼に芸妓の関与が強く見られる（もしくは、見られた）。従来、都市祭礼の研究において、花柳界との関わりは周辺的なものとして扱われてきた傾向があるが、花柳界と祭祀組織との儀礼的関係や芸妓のパフォーマンスが、祭礼や芸能のあり方を大きく規定している実態があることが確認された。また、祭礼と花柳界との間にあって両者を有機的に結び付けてきたアクターが、祭礼において伝統的にパトロンの役割を担ってきた地域の旦那衆等であることが、具体的事例の解析によって明確になった。

⑤さらに、祭礼と花柳界との関わりが強い場合には、当該地域の花柳界は存続する傾向があることも明らかになった。典型的な例が長崎市の「くんち」である。長崎市では都市祭礼としての「くんち」がきわめて活発に行なわれているが、「くんち」での芸能の奉納を行なう踊町と長崎検番とが「結納」を交わし、芸妓が「町内の一員」となって芸能の披露を行なうことをはじめ、花柳界と地域社会との結び付きがきわめて密接であり、その存在を欠くと地域の伝統芸能や祭礼の実施に大きな欠落が生じるほどに花柳界が重要な位置を占めていること、これが一つの要因になって花柳界の存続が実現していることが明らかとなった。

⑥地方花柳界における「芸妓」と「娼妓」の関係について、具体的な実態把握ができたことも大きな成果である。かつて各地の花柳界には、〈芸〉を売る「芸妓」と〈色〉を売る「娼妓」とが存在していた。しかし、この両者の境界は、時代、地域、個人の意思などによって、多様かつ流動的なあり方をしていたことが明らかになった。たとえば、芸妓でありながら客の誰とでも肉体関係を持つ者を揶揄した「不見転（みずてん）」ということばの存在、「芸妓」と「娼妓」の看板を二枚持ち、宵の口は芸妓として宴会に侍るが、客からの要求があれば娼妓ともなる「二枚芸者」、「有芸娼妓」などの存在について実態を明らかにすることができた。そして、これらの事例から、かつて芸妓と娼妓の境界は現在のようには明確に分けられたものではなく、流動性のあるものであったこと、ただしその一方で、芸妓の間には、「芸妓」と「娼妓」を明確に異なるものとする意識が存在していたこと、すなわち、〈芸〉と〈色〉の境界は、複雑で動態的であったことが明らかになった。

⑦観光花柳界文化の構築事例。「衰退」ではなく、すでに花柳界が「廃絶」してしまっている地域において、観光用に花柳界文化を再構築する動きも発生している。秋田市の事例がそれである。秋田市の花柳界は 20 世紀末に一旦廃絶したが、2010 年代に入り、地域活性化を目指して起業された地元の会社組織によって「あきた舞妓」のブランドのもと花柳界文化の再創造が開始されている。その

際、従前の花柳界自体は廃絶したものの、当時の関係者は芸妓も含めて存在しており、新たな花柳界文化の創造にあたっては、かつての花柳界の記憶を持つ者との間で、花柳界文化についての価値認識をめぐって葛藤状態も発生している。新たに観光用の花柳界文化を構築しようとする際には、過去の花柳界との断・続をいかに行なうかが大きな課題となっている状況を把握した。

（３）方法論上の成果

なお、本研究は、「民俗学的研究」を標榜するものであるが、本研究を通して、民俗学方法論に関しても、新たな実験的試みを行ない、成果を得ることができた。それは、つぎの２点である。

①旦那衆文化を視野に収めた新たな都市民俗研究としての展開。

花柳界の主たる顧客は、長らく旦那衆と呼ばれる上位町人層やこれと関わる地方政財界関係者であった。この点から、花柳界文化は「旦那衆文化」であるともいえる。これまでの民俗学は、旦那衆など「上位の社会階層」にある人々をうまく研究対象とすることができないできたが、都市民俗研究が地方都市の社会と文化を総体的に把握しようとする場合、この階層を対象化することを避けて通ることはできない。

地方都市の花柳界を取り上げて民俗学的分析を行う本研究は、これまで研究のなかった「旦那衆文化」を視野に収めた、新しい都市民俗研究となった。また、本研究を通して輪郭が明確となってきた方法論は、花柳界研究を離れて、都市民俗研究が「上位の社会階層」を対象化する際に広く応用されることも期待されるところである。この点で、本研究は民俗学方法論の進展に大きく寄与するものとなっているといえよう。

② 個別地域調査にとどまらない、全国調査による俯瞰的研究。戦前を中心に、かつての民俗学は、全国を広く歩きまわり、そこで得た調査成果を横並びにして全国を俯瞰するという研究手法をとっていた。しかしながら、戦後、社会人類学の構造機能主義の影響下、一つの個別フィールドにおける文化の有機的連関を明らかにする方法（個別分析法）がとられるようになり、全国を俯瞰する研究はほとんど行われなくなってしまった。だが、構造機能主義と全国調査とは二元的に対立するものではない。個別地域における文化の有機的連関に十分注意をはらいながら、全国を広く調査して日本列島を俯瞰する研究が行われるべきである。本研究は、まさにこの立場に立って研究を進めてきた。本研究は、民俗学全体に対して、「全国調査による俯瞰的研究」の有効性を提示し、「全国広域調査の復権」を提案するものとなっているといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①谷岡優子「地方花柳界の文化資源化・観光化」『旅の文化研究所研究報告』25、pp.37－54、2015 年 12 月、査読あり。
②谷岡優子「地方花柳界における〈芸〉と〈色〉—諏訪湖沿岸地域の事例—」『関西学院大学先端社会研究所紀要』12、pp.31－48、2015 年 3 月、査読なし。
③<u>島村恭則</u>「フォークロア研究とは何か」『日本民俗学』278、pp.1—34、2014 年 5 月、査読あり。

〔学会発表〕（計 10 件）
① <u>SHIMAMURA, Takanori</u>, “What is *Minzokugaku*?: An Introduction to Japanese Folkloristics.” Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany. ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ミュンヘン市・ドイツ）、2016 年 10 月 28 日。
②TANIOKA, Yuko, “Conversion of Value in the world of Geisha Performance.” Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany.

ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ミュンヘン市・ドイツ）、2016 年 10 月 29 日。
③谷岡優子「花柳界における伝承の現在—松山市・秋田市を事例に—」国立民族学博物館平成 27 年度若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館（大阪府吹田市）、2015 年 11 月 12 日。
④谷岡優子「地方花柳界の現代的展開—愛媛県松山市の花柳界を事例に—」第 67 回日本民俗学会年会、関西学院大学（兵庫県西宮市）、2015 年 10 月 11 日。
⑤谷岡優子「地方花柳界の再活性化—マイコ（舞娘・舞子）の前景化を中心に—」日本民俗学会第 880 回談話会、神奈川大学（神奈川県横浜市）、2015 年 5 月 10 日。
⑥谷岡優子「地方花柳界の文化資源化・観光化—地方七都市をフィールドに—」第 21 回旅の文化フォーラム、シェラトン都ホテル東京（東京都港区）、2015 年 4 月 12 日。
⑦谷岡優子「地方花柳界のゆくえ—マイコ（舞娘・舞子）の前景化を中心に—」京都民俗学会第 276 回談話会、京都市職員会館かもがわ（京都府京都市）、2015 年 3 月 29 日。
⑧谷岡優子「地方花柳界の再活性化—模索と葛藤をめぐって—」日本民俗学会第 66 回年会、岩手県立大学（岩手県滝沢市）、2014 年 10 月 12 日。
⑨島村恭則「ヴァナキュラー・トラディション・通時的リフレクション」日本民俗学会第 66 回年会、岩手県立大学（岩手県滝沢市）、2014 年 10 月 12 日。
⑩島村恭則「フォークロア研究とは何か」日本民俗学会第 65 回年会、新潟大学（新潟県新潟市）、2013 年 10 月 13 日。

〔図書〕（計 2 件）
①島村恭則（分担執筆）『関西弁辞典』真田信治監修（「花街のことば」を執筆）、ひつじ書房、印刷中。
②島村恭則（分担執筆）『地方都市の暮らしとしあわせ』総頁数 429 頁（「高知の花柳界」（p.92）、「得月楼」（p.93）、「お大尽遊び」（p.94）、「芸妓と娼妓」（pp.95－100）、「『土佐のお座敷文化』を継承する—濱長と土佐芸妓かつを—」（pp.380－389）を執筆）、高知市、2014 年 3 月。

〔その他〕
（講演）
・島村恭則「日本のお座敷文化」伊賀市教育委員会、2013 年 9 月。

6．研究組織

(1)研究代表者
島村 恭則（SHIMAMURA, Takanori）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：10311135

(4)研究協力者
谷岡 優子（TANIOKA, Yuko）
関西学院大学大学院・社会学研究科・博士課程後期課程